

第26期第1回理事会議事録

日時：1990年7月26日（木） 15：00～17：00

場所：気象庁観測部 会議室

出席者：浅井，小倉，竹内，村山，木田，藤谷，青木，
村上，安富，安成，松原，佐藤，中村
（監事）多田
（理事26名，出席理事13名，委任状13名，理事会成立）

議事

1. 仮議長選出

浅井理事を仮議長に選出

2. 第26期理事長の選任について

議長から各理事に立候補の意志を求めたが立候補者がなく，あらためて出席理事に対して推薦を求めた結果，全員一致で浅井理事が推薦された。浅井理事の承諾を得て，第26期の理事長に前期に引き続いて浅井理事が就任することになった。

3. 理事長代理の選任について

理事長の指名により竹内理事が理事長代理に選任された。

4. 常任理事の選任について

理事の中から関東地区の理事13名が常任理事に選任された。

5. 常任理事（理事）の事務分担について

分 担 業 務	正	副
庶務	青木	中村 松原
会計	中村	佐藤
天気編集	藤谷	菊地 安富
気象集誌編集	村上	木田
気象研究ノート	村山	竹内 青木
講演企画	木田	佐藤
教育と普及	安富	村山 松原
通信メディア	村上	村山
学会賞推薦	田中	
藤原賞推薦	小倉	
奨励金・各賞	中村	竹内
堀内基金奨励賞	安成	
山本・正野論文	廣田	
国際学術交流	安成	小倉
総合計画	木田	佐藤 安成

6. 評議員について

総合計画担当が原案を作成し，理事会で検討する。

7. 各委員会の構成について

担当理事は第26期の委員会の構成を8月20日までに事務局に報告することとした。

8. 第25期理事会の引継ぎ事項

第18回常任理事会審議事項9項について確認及び補強のため次の事項について審議が行われた。

1. IAMAP-93

IAMAP-93 の今後の運びについて概略説明があった。

2. 役員制度の検討

運営体制に関わる重要なことなので，選挙の方法も含めて当面，総合計画と庶務が検討する。

3. 会員データベースの外注について

UAP にデータベースの構築について検討を依頼してきたが，役員制度や定款の改正などで進捗が一時停止していた。早急に作業を再開する必要がある。

4. 会計事務の合理化・事務局体制の強化について

- ・会計処理のパソコンソフトの導入促進
- ・学会の財政状況の把握
- ・税務関係の見直しが必要
- ・財務担当理事の名称変更は定款改正を必要とする。
- ・専務理事の制度の検討

5. 研究連絡会について

将来，研究連絡会が汎用できることを考慮して総合計画との関係を明確にする必要がある。

6. 天気の予算について

「気象学への手引」出版に着手したので，編集費や解説の謝礼など出費が多くなる。予算増額について検討が必要

7. 気象集誌投稿の際のフロッピーディスクの手順について検討する。

8. 気象研究ノートのコピーライトについて検討が必要時期にきている。

9. 予稿集の内容が理解できるよう紙面を充実するように要望があった。このことについて検討を進める必要がある。

9. IAMAP 事務局の今年度経費について

予算計画書が提出され内容の説明があった。審議の結果承認された。

10. 第37回風に関するシンポジウムの開催について説明

があった。

なお、第37回(1991年)は気象学会担当である。



気象庁気候問題懇談会温室効果検討部会報告(Ⅱ)

近年、先進工業国を中心とする社会・経済活動の著しい進展、及び開発途上国における人口の急増等人間活動の飛躍的拡大に本質的原因をもつ地球温暖化・オゾン層破壊・酸性雨・砂漠化・熱帯林の減少・海洋汚染等のグローバルな広がりをもつ地球環境問題が、人類の未来を危うくしかねない問題として世界的にクローズアップされ、世界気象機関(WMO)と国連環境計画(UNEP)の「気候変動に関する政府間パネル(IPCC)」をはじめとして、国際的・国内的に様々な取り組みが進められている。

こうした中で気象庁は、地球温暖化問題に対する内外の高い関心に応え、かつ対策策定の一助とするため、気象庁の気候問題懇談会に温室効果検討部会(部会長:山元龍三郎京都大学教授;委員:浅井(東京大)、岡本(東京学芸大)、田中(東北大)、松野(東京大)、吉野(筑波大)各教授)を設置し(1988.9)、最新の科学的知見に基づき、気候変動の実態把握と気候温暖化の今後の見通しについて、専門の見地から検討を行ってきたが、この程昨年1月に続き第2回の報告書「温室効果気体の増加に伴う気候変化(Ⅱ)」を発表した。詳細は近く発行予定の市販本を見ていただくこととして、その概要を紹介する。

今回の報告書は、我が国に影響をもつ地域的な気候変化の見通しと、温室効果気体の濃度の動向、温暖化の徴候等を中心に、最新の検討結果をとりまとめたもので、各論の構成は次の通りである。①温室効果気体の濃度の動向、②気候変動の実態と温室効果気体増加の影響検出、③海面水位の長期変動の実態・予測に関する最近の研究成果のレビュー、④温室効果気体増加による気候変化:気候モデルによる評価。

報告書の結論の要旨は次の通りである。

1) 我が国に影響をもつ地域的な気候変化の見通しとして、①冬期の寒気の吹き出しが弱まる。②夏のアジアモンスーンが強まる。2) 全ての温室効果気体が現在の増加率で増加すれば、等価CO₂濃度が倍増する2030年代に、全球平均地上気温は1.2~3.0°C上昇する。3) 温室効果気体の濃度は引き続き増加している。過去100年間の南・北半球の平均海上気温の変動には非対称性が見られ、また気候変動には数年~数10年の自然の周期変動が存在する。4) 海面水位の上昇について、新たに上昇に寄与する各要因毎に海面水位上昇量を見積り、これを基に2030年頃の全球平均海面水位の上昇量を評価した。

(椎野純一)

編集後記:今年の夏は、ただひたすら太陽が照りつける“夏らしい夏”だったと思います。これだけ太陽が照り続きますと、そろそろ夏の季語になるかもしれない“水不足”も、当然のごとくやってきました。しかし、関東地方では深刻になる寸前に台風がやってきて、議論が盛り上がりかけたところですべてを流し去ってくれました。これまた暑い夏のいつもの通りのできごとだったと思います。しかし、9月も半ばになりますと、さすがの夏も影を薄め秋霖の季節となります。1週間も雨が続けば、とたんに憎かった太陽が恋しくなってきます。

さて、『天気』では、幅広い気象学の分野をくまなく紹介するために、毎号1~2編の『解説』を掲載してい

ます。これは、それぞれの分野のエキスパートの方々に、その現状と問題点を専門外の会員にも理解できるようにやさしく説明していただくことを目的に、お忙しい中執筆していただいたものです。本号にも迫田優一氏の『気象レーダーのデジタル化について』と山内恭氏の『南極域における気候変動に関する総合研究(ACR)の経過報告』の2編が掲載されています。一部専門的な部分もありますが、大変分かり易いので、あまり馴染みの無い会員でも興味の湧く話題だと思います。これから先の号にも、他の話題が次から次へと出てきますので皆さんご期待下さい。

(BY A.B.)